



JWU 子育てサイエンス・ラボが発行するニュースレター「ゆりのき」は子育てにまつわる様々なトピックやお気軽に参加できる「子育てサイエンス・カフェ」のご案内を掲載しています。以前の「ゆりのき」も[公式HP](#)で閲覧できます

=====**第10回子育てサイエンス・カフェ報告（11月15日実施）**=====

少子化、無子化は私たちの社会や経済をどのように変えるのか。

今回の子育てサイエンス・カフェは、「少子化、無子化は私たちの社会や経済をどのように変えるのか」というタイトルで私の専門である経済学を用いたお話をさせていただきました。

現在の日本において少子化が進んでいることは周知の事実です。22世紀の初頭には人口が5,000万人程度まで減少するという予想もあります。年齢構成比も変わっていく（支え手が減少し、支えられる側が増加する）でしょう。ある程度はしょうがないこととはいえ、あまりにも急激な変化は、社会全体に様々な歪みをもたらすことが予想されます。

次に、日本では結婚と子どもが非常に密接にリンクしているため、未婚率の上昇が出産数の減少を招きやすいこと、子どもをもたない女性の数が急速に増加しているというデータを紹介しました。例えば、1955年生まれの女性では、子どもを持たない割合は10数パーセントでしたが、1980年以降に生まれた女性ではこの割合が40%近くになると予想されています。その一方で、1組の夫婦から生まれる平均的な子どもの数は、夫婦が希望する子どもの数を大幅に下回っており、その大きな原因の1つが「子育てにお金がかかりすぎる」という調査結果も紹介しました。すなわち、少子化の一因は子育てがしにくい社会の制度（日本は家族に対する支援が少ない国の1つです）であるということです。

難しいのは、子どもをもたない人が増えていることです。彼ら、彼女らが「子育て支援に税金を使うこと」が自らのメリットにならないと考えたとすると、政府も積極的な子育て支援を行うことに躊躇するかもしれません。しかしながら、子育て支援は「現在、子どもがいる家計」を助けるだけではありません。子どもが欲しかったけど経済的な理由で作れなかった人々にきっかけを与えるかもしれませんし、子どもが増えれば結果として社会保障や税金の負担が減少したり、自分が高齢者になったときの支え手が増えてくれたりします。また、市場を通じて賃金を上昇させる効果があるかもしれません。実は私は2021年の著書（共同編著）で、経済モデルを用いて「効果的な子育て支援政策は子どもをもたない世帯にも良い影響を与える」という主張を行っています。ただし、子育て支援政策には様々な形態があり、政策が効果的に機能するためには、お金を賢く使うことが必要不可欠です。結婚、男女の賃金格差、生活時間の差など、さわりしか紹介できなかった点もありますが、他分野の方にも経済学的視点に少しでも興味を持っていただけたのであれば幸いです。

（家政学部家政経済学科 伊ヶ崎 大理）

（当日の様子）



=====**子育て関連 卒論紹介**=====

「**第二反抗期の有無およびその評価が親子関係と友人関係に与える影響**」

(2021 年度心理学科卒業生 渡邊佳奈 指導教員：塩崎尚美)

本研究は、女子大学生を対象として、第二反抗期経験の有無とその背景、反抗期の有無に対する影響評価を調査し、今日的女子学生の反抗期の現状を把握するとともに、その影響が親子関係、友人関係とどのように関連しているのかを明らかにすることを目的として行われました。

調査は 127 名的女子大学生を対象として行われました。第二反抗期経験の有無の人数は、表 1 の通りです。この結果からは、今日的女子大学生も、反抗期を経験した人は少なくないことがわかります。親のどのような点に反抗的な気持ちを持ったのかについては、表 2 に示した通り、両親ともに「過干渉」があがっています。また母親では「自分の考えや気持ちを理解してくれない」「しつけが厳しい」、父親は「自分勝手な言動」といった回答が多くみられました。親に対する反抗がどのような意味を持っていたかについては、「自己主張」が 22.1%と最も多く、「親からの自立」や「親への反発」「必要以上の詮索、干渉を拒む」などの回答が上位に挙がっていました（表 3）。反抗期がなかった理由には、「反抗するきっかけがなく、反抗心が芽生えなかった」という回答が 50%と最も高く、「親がやりたいことを受け入れてくれている」

「喧嘩はするが、反抗期という程ではなかった」などの回答が得られました。

反抗期の影響を検討するために、＜反抗期無群＞＜反抗期有群＞の 2 群にわけ、さらにその影響評価がプラスの群とマイナスの群に分けました。各群の人数は表 4 の通りで、反抗期有の群には影響をプラスにとらえている人の方が多く、反抗期が無の群もそのことをプラスにとらえている人の方が多いことがわかりました。影響の内容としては、反抗期有影響評価プラス群では「人に対する態度や接し方を考えるきっかけになった」が 20%と最も高く、「自己主張できるようになった」「自分の軸を持てるようになった」「自分自身を見つめ直すきっかけになった」などの回答が挙げられました。また、反抗期有影響評価マイナス群では「親子関係が悪化した」「今でも関係が良くない」といった回答が挙げられました。友人関係への影響についての調査結果からも、反抗期の有無の影響はなく、反抗期の有無をプラスに評価している群で、友人との深い関与・関心、親密さ、切磋琢磨できる関係の得点が高いという結果が得られました。これらのことから、反抗期の有無ではなく、その影響をどのように評価しているかが、その後の発達に影響を及ぼすことが示唆されました。

表 1 反抗期経験有無の人数

反抗期無群		反抗期有群	
全くなかった	6	ときどきあった	58
ほとんどなかった	26	かなりあった	37
計	32 (25.2%)		95 (74.2%)

表 2 親のどのような点に反抗的な気持ちを持ったか

母	父
過干渉	過干渉
自分の気持ちや考えを理解してくれない	自分勝手な言動
しつけが厳しい	

表 3 : 親への反抗がどのような意味を持っていたか (上位回答のみ)

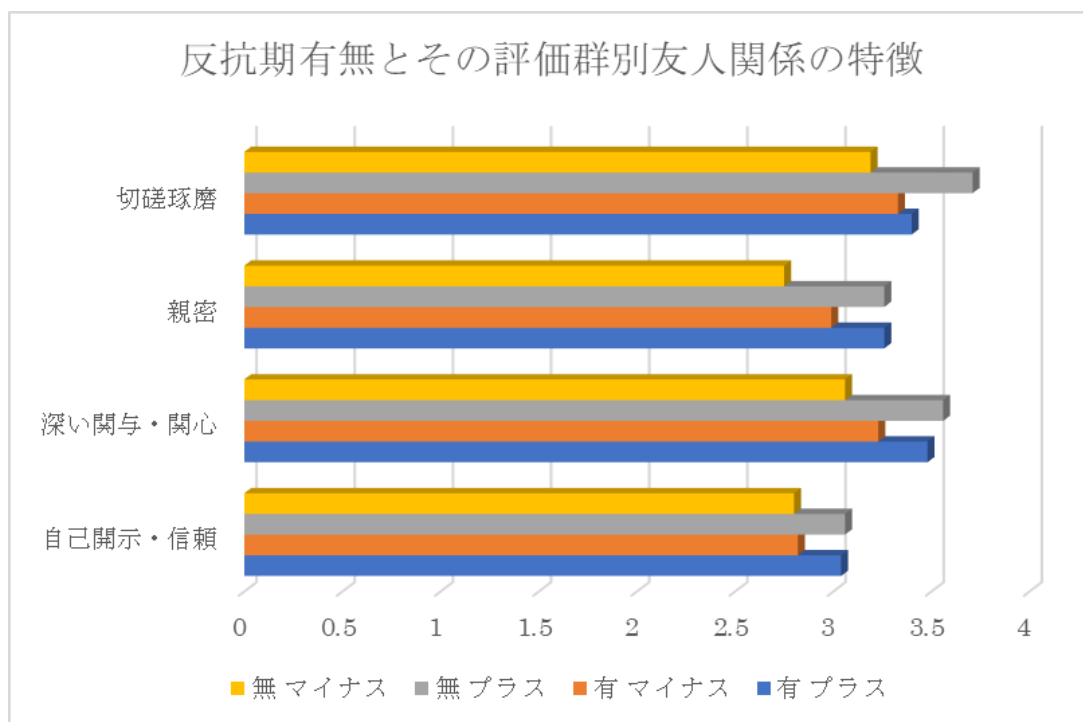
自己主張	21(22.1%)
親からの自立	18(18.9%)
親への反発	11(11.6%)
必要以上の詮索・干渉を拒む	11(11.6%)

表 4 第二反抗期の経験の有無に対する影響評価

反抗期有	影響評価マイナス群	20(15.7%)
	影響評価プラス群	75(59.1%)
反抗期無	影響評価マイナス群	4 (3.1%)
	影響評価プラス群	28(22.0%)

表5 反抗期有影響評価プラス群の影響評価内容（上位回答のみ）

人に対する態度や接し方を考えるきっかけになった	15(20.0%)
自己主張できるようになった	14(18.7%)
自分の軸を持てるようになった	9(12.0%)



=====**次回の子育てサイエンス・カフェは!**=====

第 11 回子育てサイエンス・カフェ

「共食について考えてみよう」

講師： 家政学部食物学科 教授 松月 弘恵

概要： Covid-19 感染症は私達の日常を大きく変えました。そのひとつが食事場面での黙食でした。以前は、食事は語らいの場であり、そのコミュニケーションがお互いの絆を強めていました。一方、食育では孤食を防ぎ誰かと共に食べる「共食」を求めています。「共食」といえば家庭の食卓をイメージするかもしれませんが、高齢者カフェでのお茶会、給食や子ども食堂なども共食の場です。ランチタイムのひとつ時に、共食の意義と可能性について考えてみませんか。

日時： 2023 年 1 月 18 日（水） 12：40～13：10

会場：【対面（本学学生のみ）】 目白キャンパス（会場調整中）

【Zoom（一般参加者）】 申込後に返信メールにて Zoom 詳細をお送りします。

※新型コロナウイルス感染症の影響により、急遽 Zoom 開催のみに変更の場合がございます。

- 参加費：無料
- 主催：日本女子大学社会連携教育センター
- お申込：QR コードもしくは URL からお申込みください。受付後に詳細をメールでお知らせいたします。

<https://forms.office.com/r/d32WQ52JRe>



===== 「板橋区立中央図書館と日本女子大学連携事業」のご紹介 =====

板橋区立中央図書館と連携し、「親子読み聞かせ講座」を実施

(家政学部児童学科 今田由香)

2022年10月6日(木)板橋区立中央図書館で、板橋区在住の3歳までの乳幼児とそのご家族を対象にした「親子読み聞かせ講座」が開催されました。これは昨年からはまった本学と板橋区との連携事業で、今年度は、児童学科の教員である今田ゼミに所属する3年生9名と参加しました。

はじめに、乳幼児期に子どもが絵本と出会うことの意味や赤ちゃんを魅了する絵本の表現についてお話をした後、学生と参加者がチームになって絵本を楽しみました。

子どもたちの反応はさまざまでした。赤ちゃんたちは、『くだもの』(平山和子作,福音館書店,1981)に絵が描かれた美味しそうなくだもの絵に、小さな指で触れながら「あー、あー」と声を出してみたり、『だるまさんが』(かがくいひろし作,ブロンズ新社,2008)に登場するだるまさんの動

きに合わせてお尻を揺らしてみたり。3歳の男の子は『しろくまちゃんのほっとけーき』(わかやまけん,もりひさし,わだよしおみ作,こぐま社,1972)の物語世界に入り込んで、楽しんでいました。

ご家族同士の会話や赤ちゃん同士の触れ合いも自然と生まれており、子どもたちの笑顔と生命力に触れ、絵本の力を再確認できた1日でした。



===== JWU 幼児教育・保育セミナー開催報告 (10月22日実施) =====

『いま、幼年文学を考える—「聞くことのコップ」が満ちるまで—』

(家政学部児童学科 川端 有子)

本年度のJWU 幼児教育・保育セミナーでは、「いま、幼年文学を考える—「聞くことのコップ」が満ちるまで」と題し、幼年文学について、宮川健郎先生にお話を伺いました。

宮川先生は、武蔵野大学名誉教授、日本児童文学学会の会長も務めておられる児童文学の研究者です。幼年文学とは特に幼稚園から小学校低学年の子どもたちを対象とした文学を指すことですが、先生はこの年齢の子どもたちはまだ「声の文化」のなかにいると考えておられます。この年齢以上になると子どもたちは次第に「文字の文化」へと移行していきますが、幼年文学は声の文化に暮らす子どもたちのためのことばの芸術なのだということです。絵本が絵と言葉の共同作業から意味を生み出すのに対し、幼年文学はことばからなり、絵はそのサポートをするに過ぎません。子どもたちがやがて自立した読者になり「文字の文化」に入っていく前の準備段階として幼年文学は非常に重要な役割を担っています。

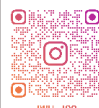
この時期、子どもたちに読み聞かせという声を中心にした身体性を伴う方法で、幼年文学を味わわせるのは大切なことで、子どもが「もういい」というまで、つまり「聞くことのコップが満ちるまで」十分に聞かせてあげることが、その後の読書経験に大きな影響を及ぼすだろうというお話が心に残りました。



Twitter



Instagram



JWU_JSC

「JWU 子育てサイエンス・ラボ」を運営する社会連携教育センターの公式 SNS アカウントです。